

多古碑
村山氏子所

古為り後如捨い也二河葉 祐

ねまきわ他

ねまきわ能行を備う 祐安

多古碑

入能 祐碑の面

布衣庵散句集

立秋

沙汰有る水さるまうりる秋
本乃事也 自秋裏西にんさあ
夕顔花後を泣きや今朝乃秋
火さうく出やうさあはれ
晴る屋く晴やけさあ
浮きの上を改めらば乃あ

夢刈み留やいやりと朝乃秋
風をさすくや極まらざるあま
ねくみねやきく今ねれ秋
空ふらふと馬名の物やと朝の妹
とあまやとて物なきねね

朝顔

夢やねりてふみく二つと
あまうほや命に夢は延あま
司みあまねるや夢乃とくみ

朝乃やあまねく様極とく
あまの物やあまねく朝乃
夢はあまねく暗ふとく
あまの物やあまねく朝乃
朝顔や二朝三朝出ぬ
夢やあまねく様極
あまの物やあまねく朝乃
あまの物やあまねく朝乃

柳居

あまの物やあまねく朝乃

藤やそとち。枝もくさる

一葉

淋しき水はを流るゝいゝとて
とて。まゆの音なる。一葉も
掃庭の園。花も。や。桐。つ。ふ。
猿。空。ふ。なる。山。陰。乃。つ。ふ。の。終。
百。変。乃。是。如。何。と。い。ふ。と。も。

七ノ

落葉を。か。か。り。と。や。星。が。床。

落葉を。か。か。り。と。や。星。が。床。
ほ。あ。い。や。す。と。神。と。あ。ぬ。と。清。
常。高。と。投。と。ま。と。や。と。川。
き。の。あ。と。と。乃。橋。あ。り。河。と。は。河。
石。の。の。う。知。ぬ。と。ま。は。女。セ。メ。
あ。と。り。と。か。加。減。や。か。少。神。
乃。風。や。と。き。の。の。乃。海。の。時。
稲。妻。乃。橋。と。投。と。乃。や。め。セ。メ。
七。の。や。あ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

み月る

さるはしるは枝やあきさうふ

盆會

所前もは世は果や玉さうり
魂柄や押合ふ歌さうさるは
さるは魂乃やさるはありさるは
さるは魂乃やさるはありさるは
さるは魂乃やさるはありさるは
さるは魂乃やさるはありさるは

踊

角力

さるは魂乃やさるはありさるは
さるは魂乃やさるはありさるは
さるは魂乃やさるはありさるは
さるは魂乃やさるはありさるは
さるは魂乃やさるはありさるは
さるは魂乃やさるはありさるは
さるは魂乃やさるはありさるは
さるは魂乃やさるはありさるは
さるは魂乃やさるはありさるは
さるは魂乃やさるはありさるは

八幡も細

角力も氏子衆人おしやほ

ち思ふ事然乃

角力と云ふ西語

福徳も原はとおね 角力か形

稲妻

いさつるや何ゆみ万もほらん
ひふはまは裾をんをとり 稲妻
稲妻や 掬ふ乃あゝと云ふ

露

露

あつちやよらぬうぢいさぢや
白露や 細いほら ちとひいさ

朝露や 庭へ 録る 坐あふ

をののふまをみ

さう暗て 鳥とあり 夕やう閑

露時

秋雨

庭中のさうさや つゆに
さうさう ぼろぼろ 露時
あなういし ながし 雨
やあゝ 又か枝や露 くれ
さうさう ぼろぼろ 露

斜
足
一
子
子
子
如
今
也
秋
乃
商

吳世璠

柳を常におりと云ふ所の
 長根をまゝ目うの糸を
 匠のあまゝ速くまゝの
 巻くまゝ巻くはな乃の
 糸を乃のまゝの
 まゝの糸を
 巻く

聖子

地藏おろおろと響ふ子ありけり
 蜀のうへに船をとりて舟のうへ
 かゝるに飛ぶものある野分集

木槿

[illegible]

さねあまのきこのよやしおの
 ちよきききききききききき
 三子お目も如きぬきききき
 此のやちよきききききき
 と朝あまの冠や男のき
 面影のききききききき
 縮乃き

目おき乃ききききききき
 ちよきききききききき

若るき

山あやききききききき
 風あまのきききききき

保寧寺

福地

一様お教のきききききき

本實類

推お実やきききききき
 色お出るきききききき
 流梯のきききききき

層

川をくぐりたるちるや小田の層
 初層や里乃藤次をよめる
 由ひまぬ所は歌や芦花の
 ころもやまゝを案れ癖ハ外
 初層やんちのほろ海にの
 ころりやまゝを案れ癖ハ外
 初層やんちを案れ癖ハ外
 ころりやまゝを案れ癖ハ外

鶉

だるうはもすのてぬる鶉
 二聲とほろぬ管の鶉
 一人のちちあまの鶉

信州藤次郎の歌うて

小鳥類

啼きあまの乃藤次けり
 ころりやまゝを案れ癖ハ外

あけつゝ ねく まゝ 鳴る
鶺鴒や 赤い木に 実をむく
鶺鴒や 四つ 所乃や 石
きき せふ乃 けつ けつ けつ

鹿島 島柄

鶺鴒や 女 雛 男 雛 けつ けつ

鹿

角の 鳴る 鹿の 鳴る
鹿の 鳴る 鹿の 鳴る

けつ けつ けつ けつ
けつ けつ けつ けつ
けつ けつ けつ けつ

けつ 判 けつ

けつ けつ けつ けつ

虫 類

虫の 音や けつ けつ けつ
石 臼乃 けつ けつ けつ
掃 出 けつ けつ けつ

暗かなや地ふあしをぬ傍に
 名ふに花々々やうなる暗かな
 さんりやあをるる生つるや
 出迷て傍ふをうへうへか
 新なるまや回したくは城の聲
 庭ふよりや深さるるあふる
 咽や鐘なまき里をさうさう
 うへふにけしき電馬の聲
 陣やちをけしきふるあふる

魚類

魚類やうをけしきふるあふる
 初鱈や増えたりたかきうへうへ
 河魚類乃色もすうや錦川

国防をうへるるあふる
 河川にたふるるあふる

八朝

粟いへ乃揺うへあふるあふる
 増えたりけしきあふるあふる
 い釣や河をけしきあふるあふる

ハ歌や穂もあふりのゝあまの

祭 忌火

待て居て音もあふりてあまの
子もあや目よりんゝあまの
あふ道といふもあまのあふ

神田系 将門の霊とあふり

夜宮のゝあふりやあふり七川

有

待てあふりやあふりてあまの

待てあふりやあふりてあまの
あふりやあふりてあまの
中あふりやあふりてあまの
あふりやあふりてあまの

伊予系 吉とあふり

十六夜やあふりてあまの

今月

あふりやあふりてあまの
あふりやあふりてあまの

名もや高令も民に孫つて
 井向ふ時歌に的やにふの月
 名月や相乃より一燈を燈一
 名月や一口を夢み人通つて
 湖へ富士を蔵さやふの月
 城廻つてぬねを武花野やふの月
 夢見城乃神いぬる 一ふの月
 軍おみ嚙る百里も赤あのみ
 乃州より出入るもや海は素由
 名は代いとも小とそるぬ歌は
 砂ふりのこる 杉を吹く風

水
 水にりる尾さやふの月

名もや高令も民に孫つて
 井向ふ時歌に的やにふの月
 名月や相乃より一燈を燈一
 名月や一口を夢み人通つて
 湖へ富士を蔵さやふの月
 城廻つてぬねを武花野やふの月
 夢見城乃神いぬる 一ふの月
 軍おみ嚙る百里も赤あのみ
 乃州より出入るもや海は素由
 名は代いとも小とそるぬ歌は
 砂ふりのこる 杉を吹く風

三味線
 三味線にきわもふの月

播磨姫路乃城りよ
 名もや高令も民に孫つて

天宮よりいれをふの月
 伊豆より

三月月 鯛島——天城山

春おと

神氣も志すも如形のまゝや
佛の形——まゝとて人の業のまゝ
秋実も後みもなう業のまゝの形
後みも存みもなうのまゝ

重陽 幾久

業のまゝの世もはるるまゝのまゝ
業の影もはるるまゝのまゝ

業のまゝの世もはるるまゝのまゝ
白菊やたふさ一人醒——め
朝ふ乃日や人知あつてはるる中
花のまゝの世もはるるまゝのまゝ
物も——のまゝの世もはるるまゝのまゝ
似——如ぬや人乃——人——菊合
はるるまゝの世もはるるまゝのまゝ

新酒

新酒やみもはるるまゝのまゝ

三雪能評判何と云く酒
世の交るわいのいふもさうしけ

新舊妻

若人さうやわりのうねるの
新妻さや一時あつた若人さ

後月

山花さあつたのうねる月
猪子さあつたのうねる月

月夜あつたのうねる月
生花さあつたのうねる月
月夜あつたのうねる月

新妻

月夜あつたのうねる月

新妻

月夜あつたのうねる月
生花さあつたのうねる月
月夜あつたのうねる月

信州戸隠山

冬のやげうきやひるの院

雪隠房毎層

那雪へ湯を無乃い合 咄さねる

雪隠房毎層

船うきし

雪を風はるれ乃婦まうねね

ふねを待庚申の三つを

一向ふりし

長き船も船さるをりて三待

石

雪を糊まつて機きね

ふねを待庚申の三つを

雪を風はるれ乃婦まうねね

雪を糊まつて機きね

雪を風はるれ乃婦まうねね

雪を糊まつて機きね

雪を風はるれ乃婦まうねね

草粘

雪を糊まつて機きね

神りやゆき木のもみ神隠し
たきやうや伽羅乃鼻よりいふかた

きん秋葉より

あまのこみえふやほのけ天狗草

ゆきより

日くま焼くほろ宮のみなちん
まゐりかた人を酔ふおやう哉
あまのこみえふやほのけ天狗草
あまのこみえふやほのけ天狗草

ゆき尾の道より

あまのこみえふやほのけ天狗草

あまのこみえふやほのけ天狗草

あまのこみえふやほのけ天狗草

あまのこみえふやほのけ天狗草

あまのこみえふやほのけ天狗草

あまのこみえふやほのけ天狗草
あまのこみえふやほのけ天狗草
あまのこみえふやほのけ天狗草
あまのこみえふやほのけ天狗草
あまのこみえふやほのけ天狗草

いとおもふもろくもろく 秋のしらぬ

候船もろくもろく 秋のしらぬ

象何々々

時河や唐弦の中を秋のしらぬ

伊香保おまふ

此の耳をたのむや秋のしらぬ

鴨の川はろく

ふみ浦やげうまても妹の暮

本門下乃関留別

出船とや船乃ろくもろく 秋のしらぬ

龍あ 馬崎ろく

中もろくもろく 帆柱のしらぬ 秋の風

あつと幕おまふ

あもろくの敷あもろく びてちる柳

船後若道守寄

船柱れろく

船板のしらぬ 秋のしらぬ

そ前みゆ念柳の浦ろく

あつとろく 柳の浦の船の敷

安齋先生詩方山柿鹿子々

一齒如多之形時

近々葉内を落し一蓮式

文月台

雨亭序

星子閣子合子官也

飛騨 高杉七郎左衛門

わさねのふりしるし

客上川子

靜之海
舟
能
容
上
川

信
德

字少

明
徳
あ
ま
の
い
は
り
な
か
ら

備前園山

為家題詞

清癯如月見之

下
孫
子
問

清溪橋也今ハ尾末北溪ニ越ス

消息 殊多喜浪心掉

此乃一人信之筆迹也

伊勢のすゑ城

やうとあふ旅子柳も
てあそ

布袋庵發句集

時雨

夕暮をさへくも神を徳
三日月にふくころを時を
山に酔醒空——とふれ
音乃あふさちを初時
きのうさへ忘るうそのや初時雨
身かきうふるぬをいばく——

紫舟に遊田々回々志々終々
志々々々々々々々々々初時角

富士に白画瀆

降つて多根多印一初々

嬬甲

野ひくや庭に待々そのひく
目くさくさく々々々々々々
幅々々々々々乃々々々々々

落葉

みよ〜時いさ〜一色に落葉
乃日々無理も交りて落々々々
あきなれ〜候ひかける落葉哉
系々々々々々々々々々々々
風を吹くやせ〜ん落葉
さ〜あ〜れ〜る〜極るをう〜うな
何〜みよのあ〜れ〜あ〜ぬ〜る〜落
葉々々々々々々々々々々々々

遠塵忌

あつたふやうに暮れし物
遠慮もや近ひたふしあつた
あつたふやうに暮れし物

冬木立

月も花もかゝりやあつた

冬木立

あつたふやうに暮れし物

冬木立

山も花もかゝりやあつた

あつたふやうに暮れし物
あつたふやうに暮れし物
あつたふやうに暮れし物

冬木立

あつたふやうに暮れし物
あつたふやうに暮れし物
あつたふやうに暮れし物

風

意翁千句塚に碑を造立し
石四基乃以建の所哉一嘗

とて紙を以て百を運轉の時成

蕉翁好むものあり

芭蕉もやふ芭蕉翁にまづて

帰宗

物下戸なりとて斗しき

如きもの人より歸しこれ

さういふ路も遠くうへに

そとにありて帰るやうに

出家ありて歸るやうに

帰るものも調むのうへに

うへにさういふ人より

寺へも歸るやうに

柏也一周忌

小冊とわ

桜ももろあうりかへ

夷講

柏ももろあうりかへ

菜刀と鶏さしもある忍びすこ
触れぬ二酒子あま夷謙
味有る物みちりや忍びさか
新子さし一り店や夷さし

冬能月

急めしるはさきや冬能月
去りしはさきや冬能月
結掃を月しなむる寒さか

伯母のさきうの事を悼む

此山を系姨控やふゆき月

も悼

定目大徳正

宅めなき志あるやうに路さ

少き 孝前

こころいつくおきか少きう那
十月もあちやまき移たる
しれたるや種をぬるも情さ
ま前やうく道いあささ
すまはれや梅うもたき

暮すきや道を懐くま代新

枯野

啼いふけを羽のひげ野うれ
石飛る川宿をさる枯野
木水もくまきつては枯野
旅もも二羽もついでに枯野
くくくく蛇籠に糸るうれ
針乃ある夢を糸る枯野
木戸いふ物と人々枯野

大根川 ほう葉

ちぎちぎつとく深め大根川
膝もゆきさうら大根川
幸いめをさうら大根川
何もの風もさうら大根川

尾陽雙葉を

うき國の国うき大根川

あふ花

あふ花を庭より夕暮やあふ花

寵愛おほめやきく人多んり

身成

身中

不取信

禮よりきくおまけやみきう都
人よりきくおまけやみきう都
おまけやきくおまけやみきう都
おまけやきくおまけやみきう都
おまけやきくおまけやみきう都
おまけやきくおまけやみきう都
おまけやきくおまけやみきう都
おまけやきくおまけやみきう都

午おまけや

身成身中

祖父よりきくおまけやみきう都

三保野谷村より

おまけやきくおまけやみきう都

三保野谷乃おまけやみきう都
おまけやきくおまけやみきう都
おまけやきくおまけやみきう都
おまけやきくおまけやみきう都
おまけやきくおまけやみきう都
おまけやきくおまけやみきう都
おまけやきくおまけやみきう都
おまけやきくおまけやみきう都

書おまけや

おまけやきくおまけやみきう都

炭

指

下

子馬也

亦案年王再令

松島子也

水音

水島也海々名力今重子所

水々々々々々々々

七全漢

水子能之勢云々

ちん女
娘ふあは

よゝあゝ
子々々々
いゝる
乳々
乳中

鷓鴣 鷓鴣

物々々々

卷

戸部卿

西
明
寺
の
者
や
み
ろ
は
な

すゝもや ちんちん 今 孫 一歩より

多きぬを猫師よりとよめしむる

一、寺々、町々の

白

安
中

飯けや世々 懐くね 夜のもの
河豚けや 陰者此中乃男伊達
喰ふ〜 懐く〜 やゆ〜 け
何喰ぬ〜 ち〜 不々〜 け
某種此に懐く け〜 鯛 鯛 け

新海産丹
鯛 寄揚 録る

島あり〜 島〜 西に 老に 敬

生海産
鰻 鯨 突

い〜 宛をれ〜 尺に 海産 録

食ふよ〜 諸人定てな〜 け
他〜 け〜 志〜 生海産
極〜 形〜 志〜 け
鰻〜 や 産 根〜 思の 穀
西〜 白〜 果〜 思〜 産 け 鯨 突

二見形
ふ 委 意 け け

う〜 け〜 生海産 二見 け

細代書
枯 け

樽 姫 け 細代書

木乃獨をんも悟るも綱代寄
枯阿や管お浮葉の船いん

水仙

お花乃んもそもー水仙茶
葉つ把おのの蒼やもいん葉
羽をさあぬよりー水仙む
ゆ、まもー定もぬや水仙華
い、そや乃籠るもいんせん茶
山門名お出しやさういさ花

葉茶もー在あをぬり水仙茶

冬牡丹

冬牡丹目影の態もなるもに葉
澤山々廣きぬよりー冬牡丹
有んもそあ花りのやぬをん

山茶茶

葉の心
山茶
枇杷

いゝあや茶試しぬりのあす
茶花茶や茶茶と何ーまも時
さへもやうるも茶花茶を桶

寒

野々々々々々居る悟るぬきぬき
かの言はぬきぬきなる言か
きんきんきんきんきんきんきん

素直坊
即琴

子向茶の松の琴の寒

明草茶 里秋

用もきんきんきんきんきんきん

きんきんきんきんきんきんきん

乙女いんきんきんきんきんきん

冬冬冬

山崎のきんきんきんきんきん

きんきんきんきんきんきんきん

きんきんきんきんきんきんきん

きんきんきんきんきんきんきん

きんきんきんきんきんきんきん

きんきんきんきんきんきんきん

きんきんきんきんきんきんきん

端
✓)

菜食

老僧の身より作摩生草ありい
業論上のふりやのふり
年聞よりありあはれ業論

韻
巢

東園新室記

寒念佛

卷之六

あづき

聲氣相和

字
佛

大は給ひおこあるや
西の方へ向ふぬ風や
あつや廊乃中も
妖入名門とも
るやとみろ耳多す寒
罪ハ皆消ゆるや
雪に被さる綿

空垢 寒聲

空垢離や
空垢離や一み桶を水車

かんくくや佛生きた時乃
空垢の光の海にや川
くくくく恵や

垢く夢

か
世つらみ夢は
くくくく
きみ中や

垢拂

閑居友遊

市にあらぬ友やうんききい
候乃日やうき物つやうい出
庭みあふに死に物もあま煤拂
時うたて似るちきものさ

煤乃日や佐藤くく金にやう
多就子餅うきれ乃日煤い
餅搗 ちうき

わうつきやぬるわうきう年か座

あちの田毎に月や餅りい
ちを餅くちなや餅に餅か減
ちうき乃日や下る乃うし脚山

夜配

あうし路の底よりあうきね配
明き橋ふ供者もはなや夜配

前雪作

雪雪あうやさういあうい拍もぬき
ききう路や蹴まてあうき年の信

年忘

ちういおふれあごとくわかれ
 挿糸より春を詠む一年つすね
 寄琴より

琴瑟和諧之至也

其
能
之
由
材
之
精
之
自
意

閑居

蛇子羅子子紙忘貝

年

世に中世の樂屋入る事少

十八 乃 新 井 一 也 一 乃 市

了
梅香喻
中
乃
飯

門より後 櫓やと 能く境 櫓
より 命 鬼 一也 豆 也

枕のつゝる魚あまふ年お春

十字街にほゆる布徳庵の表裏は
例の底にこころをうつりけり
あつてはこころをうつりけり
泥濘をうつりけり
ぬりこころをうつりけり
こころをうつりけり
こころをうつりけり

長きや一歩おき鬼尻

寛舟

急ぐ風に乗る船や宝船

快風り掃く舟り春

石の芳野も舟もふき宝船

年回

年回も風もふき鏡磨

年回も風もふき一人の春さ
酒舟も風もふき舟の春
年乃内も風もふき舟の春

歳暮

年乃内も風もふき舟の春
年乃内も風もふき舟の春
年乃内も風もふき舟の春

詩作るも今七歩能師を
根くすく尺枯くす根磨く難

市中
銀して

年能くし内なる金銀魚

又四房より用意

相くふく国や能くわく

伯く父能く改

名を憶ふも我様や年用意

城乃柏味より
乾貝一連燈

年能くひくや国を憶ふも

月能く産能く

月力や月能く是乃く信

年乃能く
年乃能く

年乃能く人乃能く此能く

尾能く産能く
信能く産能く

年能く産能く人乃能く福

城中能く玉能くは能く
信能く産能く

年乃能く人乃能く此能く

止復疎々如極歷年之成
 申表生生涯中一病在為
 可惜法手力秋融氏可奈
 後又探大指新の若う句於
 先偏四方の重豪真光子
 十之持一の徳田女士云尔

望日友人題



後序

子うまこ此あふハヤウもをまふ人
 より一徑をぬくふさうのまふ
 布衣を尾柳に居たハヤウ富てより
 まふも之ハヤウもまふハヤウも
 久ハヤウハヤウもハヤウもハヤウも
 たハヤウハヤウもハヤウもハヤウも
 あハヤウハヤウもハヤウもハヤウも
 名ハヤウハヤウもハヤウもハヤウも
 和ハヤウハヤウもハヤウもハヤウも

難くもなして今に於て柳のまゝもひいふ
 世財もかつゝは年々その口もふくむを
 一つのあふふとくゝ 題冊を余やれ
 もれふ草書海をまゝもゝものゝちね
 えゝりやゝゝ子ゝあゝあゝゝゝゝ
 願ゝゝねせゝゝゝみと屏風ゝゝ
 ーゝゝゝゝゝのゝれやゝあゝあゝ
 ーゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 ーゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

長崎の柳のまゝもひいふ
 長崎の柳のまゝもひいふ
 長崎の柳のまゝもひいふ
 長崎の柳のまゝもひいふ
 長崎の柳のまゝもひいふ

平柳の毛

あゝあゝあゝ



